



ສະບາຍດີ ບ້ານ ໂພນໝີ (こんにちはポンミ一村)



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

青年海外協力隊鹿児島県OB会
鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
財団法人 鹿児島県国際交流協会

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業
実行委員会 会長

弓場 秋信

(鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長)

鹿児島県青少年国際協力体験事業は、平成2年度にマレーシアに派遣以来17回を迎えた。青少年を開発途上国に派遣し、国づくり人づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場訪問を通じて国際協力に対する理解を深めると共に、ホームステイや学校等での交流・異文化体験を通じて国際性豊かな青少年を育成することを目的に、青年海外協力隊鹿児島県OB会、鹿児島県青年海外協力隊を支援する会、財団法人鹿児島県国際交流協会の3者より構成された実行委員会で実施している。

過去本事業で、マレーシア、インドネシア、タイ、ベトナムの4ヶ国に県下一円から179名の中高生を派遣した。派遣実績を踏まえ今年の派遣国は、青年海外協力隊事業が昭和40年に発足し最初の派遣国で、政府間ベースで日本が最大の援助国であるラオスとした。インドシナ半島の中心部に位置するラオスは、1899年フランスの植民地となりラオス王国として独立したのが1953年。独立後も王国派と左派（パテトラオ派）との内戦やベトナム戦争の影響で政治的混乱が続いた後、1975年ラオス人民民主共和国が誕生した。日本の本州とほぼ同じ国土に人口約580万人、多数派の低地ラオ族を含む49の民族からなる多民族国家である。

鹿児島市、鹿屋市、南九州市、南さつま市、枕崎市、霧島市推薦の10名、企業の協賛を得ての実行委員会推薦4名の計14名は、2回の事前研修でラオス語、ラオス事情、青年海外協力隊等の国際協力、日本・鹿児島について学び、平成20年7月20日、7泊8日の日程でラオスに向け出発した。

団員は、国際協力機構JICAラオス事務所を訪問し、ラオス事情、国際協力について学び、ビエンチャン県ポンミー村での4泊のホームステイに臨んだ。言葉・生活環境・文化・価値観が異なる村での生活、小学校での剣道・日本舞踊・習字・歌などの日本文化を紹介すると同時にラオスの歌や踊りも学んだ。そして水質検査、保健師、助産師として活動する青年海外協力隊の活動現場を訪問した。

団員が初めて訪れたラオスでの体験・感想が綴られた本報告書「サバイディー バンポンミー（こんにちはポンミー村）」が同世代をはじめ多くの皆様の目に触れることを希望します。終わりに事業実施に当たりご支援ご協力を頂いた共催市、協賛企業、国際協力機構JICA九州、JICAラオス事務所、ポンミー村、同行取材の南日本新聞社、鹿児島読売テレビを初めとする多くの関係者に心より感謝申し上げます。今後とも本事業へのご支援を賜ります様お願い申し上げます。

も く じ

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 会長 弓 場 秋 信

| | |
|--------------------------------------|---------------------------------|
| ごあいさつ | 1 |
| 鹿児島県商工労働部観光交流局長 椿 哲 哉 | |
| 第17回（平成20年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要 | 2 |
| 参加団員等名簿 | 3 |
| スケジュール | 4 |
| 地図 | 5 |
| 体験事業ドキュメント | 6 |
| ～事前研修から帰国報告会までの様子を絵日記風にまとめました～ | |
| 団員が感じたこと | 14 |
| 「ラオスで学んだこと」 | 山 下 友 子 |
| 「人のあるべき姿」 | 野 嶋 秀 華 |
| 「わたしがみつけたもの」 | 松 延 梨華子 |
| 「ラオスで考えた4つの事」 | 宇津野 貴 美 |
| 「ラオスについて」 | 杉 本 新 奈 |
| 「地球に生まれて良かった」 | 大 窪 一 夢 |
| 「ラオスに行って」 | 有 蘭 貴 彬 |
| 「体験を通して」 | 永 家 勇 人 |
| 「ラオスへの旅」 | 茂 岡 希 |
| 「体験を通して」 | 宿 里 沙弥佳 |
| 「今回の体験で」 | 太 勇 也 |
| 「ラオスで感じたこと」 | 西 田 愛 香 |
| 「ホームステイ」 | 荒 武 凜 |
| 「はじめてのラオス」 | 中 蘭 賢 志 |
| 団長報告 | 28 |
| 「メコン大河に導かれた14名」 | |
| 弓 場 秋 信（鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長） | |
| 同行者感想 | 29 |
| 「優しさとひたむきさに触れた自分再発見の旅」 | |
| 上片平 文 裕（鹿児島県国際交流協会 総務企画課長） | |
| 「幸せとは…」 | 米 川 明 美（青年海外協力隊OV, 屋久島町役場保健師） |
| 「『体験する』ということ」 | 森 谷 弥 生（青年海外協力隊OV, 鹿児島純心女子大学助手） |
| 「ラオス同行取材を経て」 | 加 藤 武 司（南日本新聞社 社会部 記者） |
| 「ポンミー村で学んだコミュニケーションの大切さ」 | |
| 波佐間 崇 晃（鹿児島読売テレビ 報道制作部 記者） | |
| 新聞記事（南日本新聞, 西日本新聞） | 34 |
| ラオス活動隊員からのメッセージ | 44 |
| 参考資料 | 45 |
| 「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要 | |
| 「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績 | |

ごあいさつ

鹿児島県商工労働部観光交流局長

椿 哲 哉

平成20年度「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の御成功を心からお喜び申し上げます。

この体験事業は、鹿児島の青少年を開発途上国へ派遣し、それらの国の経済的・社会的発展に貢献している青年海外協力隊員の活動現場の体験や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともに、ホームステイや地元中高校生との交流などを通じて相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成することを目的とした全国でも画期的な事業です。

また、県ではアジアの時代を見据え、アジアの環境、経済、多様な文化などに精通した人材を育成するため、様々な施策を積極的に推進していますが、本事業は、この趣旨とも合致する意義ある事業であると思っております。

さて、現在の国際情勢を見ますと、紛争やテロ事件の発生や、領土や歴史認識を巡る外交問題、環境問題など様々な問題が発生しております。これらの問題を解決していくためには、一人ひとりがそれぞれの国や地域の文化・習慣・考え方などについて、相互理解を深めるとともに、自分ができるところから国際協力にも取り組んでいくことが必要であると考えます。

このような中、今回の体験事業では、8日間の日程でラオスを訪れ、現地に溶け込んで活躍する青年海外協力隊員の姿を目の当たりにし、また、ホームステイや地元の小学生との交流等を通じて現地の方々との心のふれあいを体験したことで、国際協力や相互理解の必要性、重要性を痛感されたのではないかと思います。

事業終了後の表敬訪問や報告会では、ラオスで体感した文化や言語、生活習慣など、思い出深い貴重な体験や皆さんの感想、また、「将来は、青年海外協力隊に参加し、国際協力に貢献したい」などの力強い目標もお聞きすることができ、たくましくなった皆さんを頼もしく感じました。

この貴重な体験で得た感動を心に深く刻んで、自分たちのできるところ、身近なことから国際協力に取り組んでいただき、皆さんが世界に通用するたくましい若者に成長することを心から期待しております。

最後に、この事業を主催された鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会を構成する各団体、及び実施に当たり御支援・御協力を賜りました国際協力機構並びに青年海外協力隊の皆様にご心から感謝を申し上げますとともに、関係者の皆様の今後ますますの御発展を祈念いたします。

第17回（平成20年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要

- 1 主催 鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
※ 構成団体：青年海外協力隊鹿児島県OB会
鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
(財)鹿児島県国際交流協会
- 2 共催 鹿児島市，鹿屋市国際交流協会，霧島市国際交流協会，
南九州市教育委員会，南さつま国際交流推進協議会，枕崎市教育委員会
- 3 後援 鹿児島県
鹿児島県教育委員会
独立行政法人国際協力機構 九州国際センター
- 4 協賛 (株)鹿児島銀行
鹿児島空港ビルディング(株)
鹿児島トヨタ自動車(株)
小正醸造(株)
薩摩酒造(株)
(株)下堂園
長島商事(株)
南国殖産(株)
(株)山形屋
弓場貿易(株)
- 5 事業の流れ 4月～5月 募集・団員決定
6月15日(日) 第1回事前研修
7月5日(土)～6日(日) 第2回事前研修
7月20日(日) 出発
7月27日(日) 帰国
8月5日(火) 表敬訪問
8月17日(日) 報告会
9～10月 報告書作成

参加団員等名簿

■団 員

| | 名 前 | 性別 | 学 校 | 学年 | 推薦市長等 |
|----|-------------------------|----|------------------------------|----|-----------|
| 1 | やま した とも こ子 山 下 友 子 | 女 | 鹿児島県立 鹿児島中央高等学校 | 2 | 鹿 児 島 市 |
| 2 | の 野 しま ほず か 野 嶋 秀 華 | 女 | 鹿児島市立 鹿児島玉龍高等学校 | 2 | 鹿 児 島 市 |
| 3 | まつ のべ りか こ子 松 延 梨 華 | 女 | 鹿児島市立 鹿児島玉龍中学校 | 3 | 鹿 児 島 市 |
| 4 | うつ の あつ み 宇津野 貴 美 | 女 | 学校法人前田学園 鹿屋中央高等学校 | 2 | 鹿 屋 市 |
| 5 | すぎ もと にい な 杉 本 新 奈 | 女 | 学校法人前田学園 鹿屋中央高等学校 | 2 | 鹿 屋 市 |
| 6 | おお くぼ はじ め 大 窪 一 夢 | 男 | 霧島市立 舞鶴中学校 | 1 | 霧 島 市 |
| 7 | あり その たか あき 有 蘭 貴 彬 | 男 | 鹿児島県立 加世田常潤高等学校 | 2 | 南 九 州 市 |
| 8 | なが いえ ゆう と 永 家 勇 人 | 男 | 鹿児島県立 川辺高等学校 | 3 | 南 九 州 市 |
| 9 | しげ おか のぞみ 茂 岡 希 | 女 | 学校法人希望が丘学園 鳳凰高等学校 | 2 | 南 さ つ ま 市 |
| 10 | やど り さ や か 宿 里 沙 弥 佳 | 女 | 鹿児島県立 加世田常潤高等学校 | 3 | 枕 崎 市 |
| 11 | ふとり ゆう や 太 勇 也 | 男 | 鹿児島県立 徳之島高等学校 | 3 | 徳 之 島 町 |
| 12 | にし た あい か 西 田 愛 香 | 女 | 学校法人鹿児島純心女子学園 鹿児島純心女子高等学校 | 2 | 鹿 児 島 市 |
| 13 | あら たけ りん 荒 武 凜 | 女 | 鹿児島県立 志布志高等学校 | 1 | 東 串 良 町 |
| 14 | なか その けん し 中 蘭 賢 志 | 男 | 長島町立 川床中学校 | 3 | 長 島 町 |

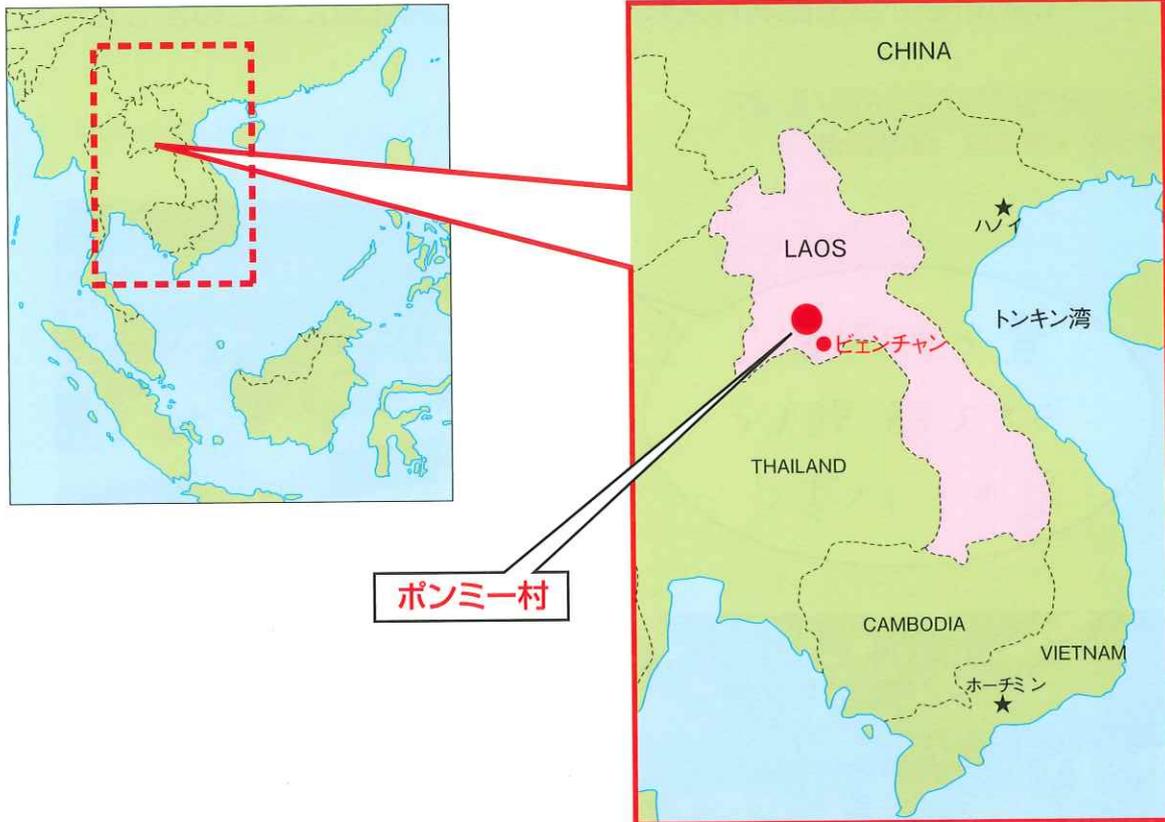
■同行者

| | 名 前 | 性別 | 所 属 | 担 当 |
|---|-------------------------|----|---|------|
| 1 | ゆみ ば あき のぶ 弓 場 秋 信 | 男 | 鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長 | 団 長 |
| 2 | かみかたひら ふみ ひろ 上片平 文 裕 | 男 | 財団法人鹿児島県国際交流協会 総務企画課長 | 調 整 |
| 3 | よね かわ あけ み 米 川 明 美 | 女 | 青年海外協力隊ラオス OV (看護師) 屋久島町役場勤務 | 調 整 |
| 4 | もり たに やよ い 森 谷 弥 生 | 女 | 青年海外協力隊ポリビア OV (看護師) 鹿児島純心女子大学看護栄養学部勤務 | 健康管理 |
| 5 | か とう たけ し 加 藤 武 司 | 男 | 南日本新聞社 社会部 記者 | |
| 6 | はぎ ま たか あき 波佐間 崇 晃 | 男 | 鹿児島読売テレビ 報道制作部 記者 | |

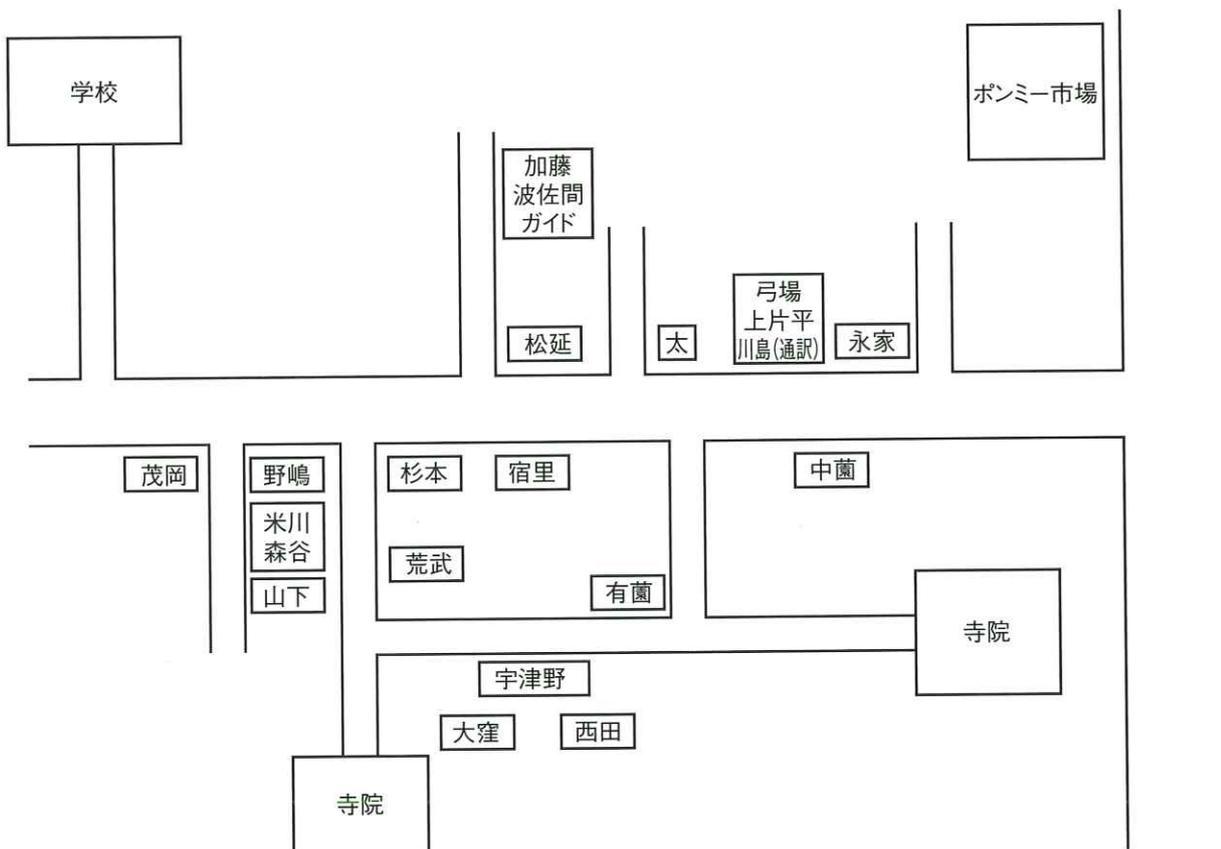
スケジュール

| 日 | 曜 | 地名 | 時刻 | 交通機関 | 内容 | 宿泊 |
|-------|---|-----------------------------------|--|-------------------|---|--------|
| 7月20日 | 日 | 鹿児島発 福岡経由 バンコク経由 ビエンチャン着 | 8:00発 8:45着 11:45発 15:05着 20:00発 21:10着 | 飛行機 バス | 集合・チェックイン 結団式 空港→ホテルへ | ホテル |
| 21日 | 月 | ビエンチャン ポンミー村 | 9:30 10:00 午後 | バス | ●JICAラオス事務所 表敬 ビエンチャン市→ホームステイ先 | ホームステイ |
| 22日 | 火 | ポンミー村 | 終日 | | ●終日ホストファミリーと過ごす | ホームステイ |
| 23日 | 水 | ビエンチャン | 7:50 9:30 | バス | 隊員活動現場へ移動 ●青年海外協力隊 活動視察 チャナイモ浄水場 水質検査 鶴飼智弘隊員 | ホームステイ |
| | | ポンミー村 | 14:00 | | ●青年海外協力隊 活動視察 ビエンチャン市保健局 保健師 鈴木彩乃隊員 | |
| 24日 | 木 | ポンミー村 | 9:00 夜 | | ●現地の子供たちとの交流 ●お別れパーティー | ホームステイ |
| 25日 | 金 | ポンミー村 | 10:00 | バス | ポンミー村→ビエンチャン市 | ホテル |
| | | ビエンチャン | 14:00 18:00 | | ●シニア海外ボランティア・青年海外 協力隊 活動視察 セタティラート病院 基礎保健 清水直美シニアボランティ ア 助産師 難波美絵隊員 看護師 早川美帆隊員 ●JICA関係者との懇談会 | |
| 26日 | 土 | ビエンチャン ビエンチャン発 バンコク着 | 終日 22:05発 23:10着 | バス 飛行機 | ●市内観光, 買い物 →空港へ移動 | 機内泊 |
| 27日 | 日 | バンコク発 福岡着 鹿児島着 | 0:50発 8:00着 13:30着 | 飛行機 バス | 解団式 | |

地図



ポンミー村 ホームステイ先



体験事業ドキュメント

～事前研修から帰国報告会までの様子を絵日記風にまとめました～

6月15日(日), 7月5・6日(土・日)

第1回・第2回 事前研修

皆と初対面!!
ラオス語 難しく
思ったより大変



7月20日(日)

結団式・出発



これから
どんな一週間
が待ち受けている
のか楽しみ ↑♡♡



乗り換え地・バンコクで



ビエンチャンに到着



村で披露する歌を練習。
まさかここでやるとは...!

7月21日 (月)

JICAラオス事務所 表敬



ラオスの内面事情
を聞いたリ、私達
が質問したりと
たくさんのお話を
学びました。

ボンミー村 ホストファミリーと対面



期待と不安で
いっぱい〜!!

同行者、加藤さんの誕生日祝



7月22日 (火)

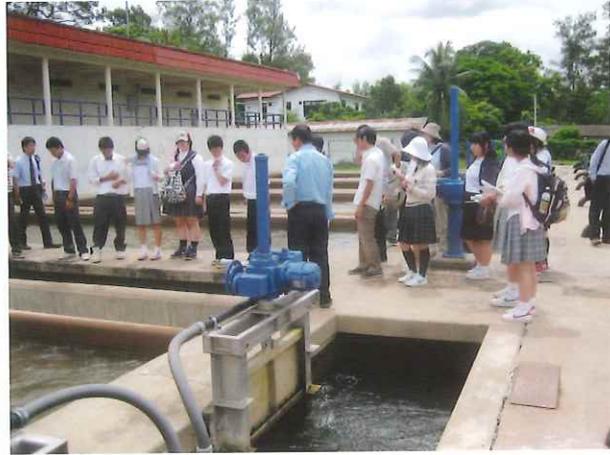
ボンミー村での一日



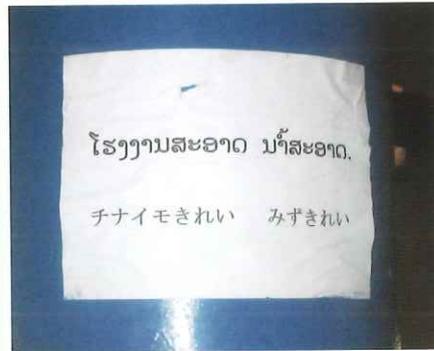
フルーツや野菜がいっぱい
いっしょに主食はもち米で
全体的に唐辛子がまいて
いて辛かったです。
また、ラオスのご飯を食
べたいなまー♡♡

7月23日 (水)

青年海外協力隊活動視察
鶴飼智弘隊員 (水質検査)



日本の技術を取り入れて検査して
いました。まだ、
課題点がいっぱい
あるそうです！



鈴木彩乃隊員 (保健師)



グループを作って
みんなで悩みな
がらも楽しく問題を
解きました(・v・)!!



7月24日 (木)

子ども達との交流会

ラオスの子供達は
習字に興味津津
最後まで人気でした!!



おはら節やラオスの
の踊りを一緒に踊
って楽しかったが、
時間が足りなかつ
たかな...



お別れパーティー



いーしの儀式。
お別れが近づいてきて
寂しい...

7月25日 (金)

ホストファミリーとの別れの朝



短い間でしたが、家族のように接してもらって本当に嬉しかったです。ありがとうございます。



青年海外協力隊活動視察

清水直美シニアボランティア (基礎保健)、難波美絵隊員 (助産師)、早川美帆隊員 (看護師)

病院内を見学したり、話を聞いたリ 日本とは違うなと感じました。



7月26日 (土)

ビエンチャン市内観光



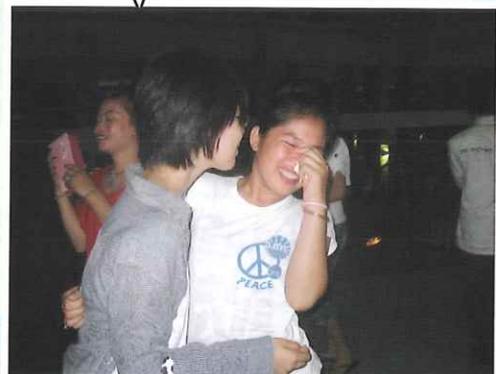
ラオスの歴史や文化に触れることが出来ました。買い物をしたりと...最後の一日を楽しめました。



ラオス出発



お別れはすごく辛かったです。空港にお見送りに来てくれました。ありがとうございます♡



7月27日(日)

解団式



8月5日(火)

表敬訪問



ラスから
無事帰国し
ました。皆々多
みなさん
ありがとう
ございました。

8月17日(日)

帰国報告会



この14人の仲間と出会え
て良かったです。皆々を
思い出が出来ました。皆々

ラオスで学んだこと

中央高等学校 2年 山下 友子

私はこの夏を、この経験を、この14名の仲間を、一生忘れません。

今回の事業が私の初めての海外への旅でした。しかも行き先はラオスというまったく未知の国。家族や友人に心配されながら鹿児島をあとにしました。

ラオスに到着してからの日々は見るものすべてが目新しく、驚きと興奮の連続であっという間に過ぎました。その中でも一番私の心に残っているのはやはりポンミー村でのホームステイです。私のホストファミリーは村長のポー（お父さん）、メー（お母さん）、ウアイ（お姉さん）、その旦那さんのアーイ（お兄さん）、そして私と同年のミノイの5人家族でした。ポーとミノイは英語が上手だったのでびっくりしました。

最初は緊張してなかなか話せませんでした。一番の仲良しになったミノイが補助をしてくれて、たくさんの人とたくさんのおしゃべりができました。中でもよく使った言葉が、「ラオス語で何ていうの?」と「お手伝いしたい」でした。少しでもラオスの人々と仲良くなりたいという意思表示をすることが大切なんだな、と思いました。また、4泊の村での生活の中で感じたラオス人の優しさは語り尽くすことができません。見も知らぬ外国人の私に笑顔であいさつしてくれたり、いろいろなことを一生懸命に教えてくれたり、体験させてくれたり…。内面・精神が「ゆたか」であることと、物的に「豊か」であることはどちらが幸せなのかと日本に帰ってきてからよく思います。人それぞれの考えがあるでしょうが、私はラオスで本当の「ゆたか」さを垣間見た気がしました。



本人：左



本人：右

別れの日には涙、涙、涙でした。「ここはあなたの家で、あなたは私の娘だからいつでも帰っておいで」と言われたときに我慢の糸が切れました。ラオスの家族や友達、村の人々の優しさに恥じないような人間になろうと思いました。ああ言おう、こう言おうと昨晚考えていたことも、いざとなったらありがとうとしか言えませんでした。みんながぎゅっと抱きしめてくれたぬくもりは一生忘れません。

そんなあっという間だったけれど中身の詰まった日々の中で気付いたことが3つあります。1つ目は英語の大切さです。外に出て初めて共通語の重要性を身にしみて感じました。2つ目は何でもやればできることです。遠慮したりこわがっていたら何もできないし、もったいないと思いました。3つ目は自分の幸せな環境です。健康に毎日学校に通い、おいしい物を食べ、あたたかいお風呂と家がある――。そんな当たり前前の「日常」を日本に帰ってきてしみじみと大切に思いました。

しかしこうした幸せな環境がすべての人に用意されているわけではありません。こうしてめぐまれた環境にいる私にはやらなければいけないことがあると思います。それをこの派遣を通して学びました。

今できることを少しずつ、ラオスの人々が教えてくれた優しさを胸に、顔を上げ前を向いて頑張っていきたいです。

最後になりましたが団長をはじめ同行して下さった皆さん、バックアップして下さった市役所、県庁、協賛企業の皆さん、応援してくれた家族と友達、そして14人の仲間がこの場を借りてお礼を申し上げたいと思います。

ありがとうございました。

人のあるべき姿

玉龍高等学校 2年 野嶋 秀華

私は、今回の事業を通して「人の根源」を心から感じることができました。ラオス人は、人類が元々持っている豊かな感性を、あるがままに率直に形にしています。文章で表すには苦しいほど、あらゆる面での刺激が多すぎました。ラオス人の温かさ、笑顔、親しみやすさは、永遠に不変のものであってほしいです。

私のホストファミリーは、父のボンベン、母のボンチャン、姉のノーイの3人でした。父と姉は英語が使えました。しかし、母とのコミュニケーションはラオ語とジェスチャーでしか保てませんでした。指さし会話帳は、母の老眼で力を発揮できませんでした。私としては、日頃慣れ親しんでいる英語の方が使いやすかったのです。そのため、母とのコミュニケーションが少なくなってしまったのが初日でした。課題を残したまま、次の日の朝を迎えました。するとステイ先に通訳の方が訪れました。姉と良い香りの香草を洗う手伝いをしていたときでした。母は通訳の方を通して声をかけてくれました。



本人：中央

「昨日はよく眠れた？ラーメン食べる？」

私は、母に対して口数が少ないのを申し訳なく思い、気がかりでした。なので、私の体調を第一に心配してくれていた母に感謝せずにはいられませんでした。姉と私が下ごしらえした香草で作ったラーメンは絶品物でした。母はヌードル店の経営者でした。私が飽きることはないよう、毎回違う味で楽しませてくれました。姉は父と共に、私に付きっきりで相手をしてくれました。

「ミーボー（疲れてないの）？」

という問いかけに、私は

「ボーミー（疲れてないよ）」

と答える。そのようなやり取りを何回したでしょうか。本当に優しさで溢れた家族でした。初めての環境に戸惑っていた私を、必要以上に心配してくれました。本当に大好きであり大切な、もう1つの私の家族です。

お別れ会にあたるバーシーの儀式では、伝統衣装のシンを着て臨みました。村のみなさんにたくさんの白い紐を結んでもらいました。そのときの唇の動きや手の力が、私たちへの期待を物語っていました。母が対面式と同じように私を抱きしめてくれたとき、何かはじけたように涙がポロポロと溢れてきました。言葉のすれ違いは多くとも、心の疎通は確かなものがありました。母は私をなだめるようにバナナやゆでたまごを手渡してくれました。普通のものより何倍もの価値がそこにはありました。他の村民の方も、私の背中をさすってくれました。見ず知らずの方でした。4日間、あるいはそれ以下という短時間で深い絆を築けることの素晴らしさは、計り知れません。そして、夕食の後。宴が始まりました。それぞれが思い思いにダンスを踊っていました。ここまでありのままに、無邪気でいて愉快になれる時間は初めてでした。そして、これが本来の人類のあるべき姿なのだと考えました。わたしたち人間の持つ豊かな感性が、ラオスという素晴らしい国で爆発したのです。

私がラオスで受けた数々の刺激。それは、ラオス人の温かな優しさが基盤にあると考えます。優しさ故の情緒の発達が、日本でなかなか体験することのない数々の経験を生み出しているのです。そんなかけがえないものを手に入れることができた私は、自信を持って誇りに思います。そして、幸せでもあります。目の当たりにしたリアルな感覚は、これからもずっと私の中に焼き付いて離れることはないのです。たくさんの人に支えられて大きなものを得ることのできた私は、未だにラオスのことを愛してやまないのです。



本人：左から2番目

わたしがみつけたもの

玉龍中学校 3年 松延梨華子

わたしは今回の「鹿児島県青少年国際協力体験事業」に参加し、ラオスという国のことを知り、ラオスを訪問することができて、本当に幸せでした。

また、発展途上国を自らの力で発展させていく手助けをする「青年海外協力隊」の方々との出会いも、わたしにとって大きな収穫です。

ビエンチャン空港におりたったわたしたちを出迎えてくれたのは、まぶしい太陽とその太陽と同じくらい輝いている人々の笑顔でした。

学校訪問では、子どもたちの前で日本の伝統文化を紹介し、わたしたちを見つめるたくさんの真剣なまなざしに胸が熱くなりました。1人1人が色々な形でわたしたちにふれようとしてくれました。

また浄水場や病院を訪れたときには、わたしたちの知らないところでこんなに海外のために一生懸命がんばっている日本人がいるのかと、今までの自分の生き方を見直すきっかけになりました。



本人：左から2番目

わたしが直接みて、触れたラオスの人々は話に聞いていた地雷や貧困に苦しむ国ではなく、明るく、人なつこく、親切なとてもいい国でした。みんな純粋で、とても思いやりのある人々です。

わたしたちの「幸せ」を願って手首に白いひもをまいてくれる、ラオス伝統のパーシーにも気持ちがあふれていると思います。

「今、わたしたち日本人は、自分のことばかり考え

ているのではないかと改めて反省させられました。今、わたしたちに足りないものをラオスの人々とふれあい、感じることができました。

次に本当に「国際交流」とは何かを学ぶことができました。真の国際交流とは、言葉で話すことではありません。「こころ」と「こころ」をつなげることが「真」の国際交流なのではないでしょうか。食文化も違い、トイレやお風呂、生活習慣も違う、もちろん言葉も違うわたしたちです。しかし、ラオスのホストファミリーや友だちと一緒に庭でおやつを食べたり、一緒に昼寝をしたり、民族衣装の「シン」とゆかたの交換をしたりしました。心を通わせ、互いに気持ちが伝わりました。

わたしには将来、はっきりした目標はまだありませんが、青年海外協力隊の方々やラオスの人々との出会いで、海外で何か人の役に立つことができるようになりたいと思うようになりました。ラオスに行って、やっと一歩踏み出すことができました。

今回の、鹿児島県青少年国際協力体験事業を通して、日本にいただけでは絶対に分からなかった「ラオスの生活」、ラオスだからこそ感じられた「ラオスの人々の温かさ」、本当の国際交流の大切さ、言葉では伝わらないことを、心でつたえること、様々なことを自分の五感と心で感じそして学ぶことができました。この体験をより多くの人々に伝えていきたいです。

そしていつか「サバイディ」（こんにちは）と笑ってラオスのお父さん、お母さん、お姉さんたちと再会したいです。



ホストファミリー

ラオスで考えた4つの事

鹿屋中央高等学校 2年 宇津野貴美

ラオスで、考えたこと・思ったこと・伝えたい事は、たくさんあります。伝えきれないです。なので私は4つに絞りました。

1つ目は、ラオスの事です。最初の印象は正直私たちが思っていたより全然裕福な国だと思いました。電気もたくさんあり、車、バイク、人通りも多くて本当に貧国で協力隊が必要なのかと思っていました。でも1週間いて思ったことは、都市ビエンチャンを出ると車道の整備もされてなく、少し前に見た風景とは、まったく違いました。これが現実。貧国の差です。テレビでは知っていましたが、自分で見るとショックが大きかったです。ビエンチャンを出ると、水道も病院も食糧も全く違いました。水道の普及率、食料自給率、病院代、日本では絶対に考えられない生活をしていました。でも、みんな笑っていました。みんな楽しそうでした。ラオスの風景はテレビで見る30年ぐらい前の日本みたいな風景、人の優しさでした。



JICA事務所前

2つ目はホームステイの事です。4泊5日という長い期間滞在しました。

最初は、言葉という大きな壁で「帰りたい」としか思わなかったです。でも必死に伝え合おうとしてくれて嬉しかったです。ラオス語会話帳や英語、手や動作で伝えてくれました。きっと私のラオス語は最後まで伝わらなかったと思います。私は2日目に散歩したり、親戚を回りに行きましたが、町で会う人や親戚の方は、私が行くと、抱きしめてくれたり顔を見してって言ったり、ラオス語会話帳は日本語なのに、その中から単語を調べてくれたり、すごく私の事を気にしてくれて、私に興味を持ってくれました。食べ物にも、気を使ってくれました。お箸を出してくれたり、すぐ水を取りに行ってくれたり、ずっとずっと気にしてくれました。

そしてびっくりしたのは、誰でも家に入って来ることです。気づいたら、普通に一緒にご飯を食べていたり、ラオスならではの風景がとてものどかでした。

3つ目は、協力隊の1人の鈴木綾乃さんが一番印象にあります。保健師さんとしてラオスに来て、たった1人で頑張っていました。綾乃さんは、整備もよくない中で今、「DOMOSOボランティアプロジェクト」という、地域母子保健をしています。ラオスには、医療機関へのアクセスをしない、できない理由があります。交通の悪さ、貧困、知識の無さ、伝統、協力隊だけではどうしてもできない現実を、今変えようと、地域の方と頑張っていました。綾乃さんができる事やJICAができる事を少しずつ、ちょっとずつこなしていこうとしていました。課題はたくさんあると思います。でも、1つずつ良くしていけば、きっといつかいい結果になるんだなと思いました。夜の交流会でも綾乃さんは、大阪についてやお笑いについて話してくれました。とてもおもしろい方でした。そんな綾乃さんは、私の憧れです。

最後は14人の仲間やいろんな人との出会いです。住む場所も高校も、何もかもが違う14人は、とても仲良しでした。仲良くなれるのかなという不安は沢山あったけど、1週間も一緒だったのでかけがえのない存在になりました。「帰りたい」って思っても、みんなが「頑張れッ」と言ってくれたり通訳してくれたり、本当に支えあった1週間でした。寝るのも起きるのもみんな一緒に、今までにはない、いい経験をしました。不安や緊張、感謝、うれしさ、沢山の思いがありました。きっとこの体験をしなければ出来なかった思いだと思います。

私は今、普通の生活がラオスでは普通ではないことを理解した上で、そのことをいろんな人に伝えるという事と、人は1人では生きていけないのと、支えあって生きてる事を伝えたいです。

私はラオス大好きです。またいつか14人で訪れることを誓いました。そのときはもっと発達していると思います。

14人とラオスが大好きです。



本人：左

ラオスについて

鹿屋中央高等学校 2年 杉本 新奈

ラオスに行くことが決まって、事前課題として「ラオス」について調べたとき、正直、こんなところで本当に生活できるの？と不安になりました。私が調べたのは、高床式の家に住んでいて、飲める水は清潔でなく、地雷が多く埋まっているというものでした。高床式の家には興味を持ちましたが、水が清潔でなく、地雷が多く埋まっているというのは、体調をくずすかもしれないし、最悪の場合、死んでしまうかもしれない。と、出発前は、海外に行けるというワクワクした気持ちより、ちゃんと生きていられるかというドキドキした気持ちの方が強かったです。

鹿児島から福岡へ飛行機で飛び、そこから、タイのバンコクへと、乗りついでラオスに到着したのは、辺りが真っ暗な夜中でした。

まず、ラオスに着いた第一印象として、何も見えない程、暗いということ。日本なら、いくら夜でも、ど田舎でなければ明かりがあるはず。上空からも、小さな光が点々と見えるだけでした。

翌日は、JICA事務所を訪問し、ラオスの経済状況を学びました。やっぱり、ラオスは発展途上の国なので、日本を含め、様々な国から支援されていました。そして、支援される身分上、権力は弱いようでした。タイやベトナムに押され、北の地域で森林伐採が行われているそうです。いくら支援しているとしても、森林伐採はメコン川の氾濫に繋がってしまうので、いいとはいええないと思います。国同士の関係を築く難しさを感じました。

また、他の日には青年海外協力隊の活動の現場を視察しに行きました。浄水場で活動している鵜飼智弘隊員は、ラオス人の職員の教育、水質研究を行っているそうです。日本の技術が取り入れられているせいか、浄水の仕組みが日本のものとそっくりでした。しかし、その洗浄された水がラオス全土に広がるわけではありませんでした。いまだに、井戸水で生活している地域もあるそうです。井戸水でも、チェックできる範囲は検査しているそうですが、それでも貧富の差は大きいと感じました。

次に、保健師の鈴木綾乃隊員に話をうかがいました。その話の中で、とても厳しい現実を知りました。

日本では、電話一本で救急車が来て、病院で治療を受けられるのが当たり前です。しかし、ラオスでは病院へさえも、行けないことがあるのです。お金がないからというのがありますが、第一に交通の便の悪さです。道路が整っていないかったり、病院までの距離が遠かったり。日本では当然のことが、ラオスでは難しいことなのです。それに、職員の人員不足や保健に関する知識・意識にも問題があります。都市の病院へ視察に行ったときも、職員の問題は大きいようでした。

しかし、貧しいだけがラオスではありませんでした。私たちがホームステイをしたポンミー村の人々は、家族をはじめ、みんな心優しい人々でした。直接、言葉は通じなくても、表情や動作で伝わってくるものがありました。もう、村全体がみんな家族のようで、近所の人とも、すぐに仲良くなれました。その分、日本人の冷たさを感じましたが、「ラオスの人々の優しさは、昔の日本に似ている。」と弓場団長がおっしゃっていたので、日本にも人を思いやる心が戻ってきてほしいと思いました。日本は発展して、仕事などで忙しくなり、周りの人のことを考える余裕がなくなったんだと思います。日本中の人々にラオスの優しさを知ってもらいたいと思いました。そして、ラオスが発展することを願っていますが、日本のように発展するのではなく、人を思う心をずっと忘れないでいて欲しいです。

今回、ラオスへ行って、ラオスへの見方も変わったし、自分の周りの人への見方も変わりました。私が体験したことを、色々な人に知ってもらおうと共に、将来へ活かしていきたいと思います。本当に、よい経験をさせてもらったことに感謝します。



本人：後列左



本人：右から2番目

地球に生まれて良かった

舞鶴中学校 1年 大窪 一夢

ぼくは、今までラオスという国を知りませんでした。だから出発の2か月ほど前までは何も知らなくて、「もう申込書を学校に出したよ」と母に言われた時はすごく驚きました。

実際にラオスに行くことになって本心では絶対に行かないという気持ちでいっぱいでした。行くまでの間に、2回の研修がありました。その中でだんだんと気持ちが変わっていく自分を見つけることができました。

自分は一番年が下だったので周りの人が怖かったので喋ることができませんでした。そしたら、隣に座っていた高校生が喋りかけてくれたので、それからはその高校生と一緒に、それで一緒にいるとだんだんと友達ができいき、すごく楽しくなりました。

いよいよ7月20日になりました。朝からバタバタと自分は眠くてしかたありませんでした。鹿児島空港に着いて出発式があるとこへいそいで行きました。そしたら、一番近いはずのぼくが遅刻でした。出発式が終わった後に記念写真をとりました。

ラオスにまず着いて夜景がきれいだと思いました。あと、日本と空気がちがうから呼吸がしづらかったです。

ラオスの大きさは、日本の本州と同じくらいで、人口はひょうご県と一緒に広いと思いました。

日本とラオスのちがいはホームステイした時お風呂が水ぶろでトイレは、自分で流す。あとは、風景がきれいだと思いました。

ラオスとのふれあいは、まずホームステイでホーム



本人：右

ステイ先は、高床式で怖かったけどなれてきたらすごくいい家だと思ってきました。その他に村長の家の人たちともふれあいました。一番ふれあったのは学校でリフティングをしたときですが、きょうみはもってもらいませんでした。ショックでしかたありません。

感動したことは、エド・はるみのゲーをやる少年が2人もいてその少年に、お別れパーティの夜に日本語を教えてあげました。すると次の日、村を出発する前に村長の家に行ったときに、その2人の少年が来て、1人がかぎといっしょに5円玉の通してあるヒモを見せてくれました。ぼくがそれに自分の50円玉も通してあげると、その少年は泣いていました。もう1人の少年も泣いていました。そんなに遊んでないのになんでそんなに泣いてくれるんだろうと僕はそのとき思いました。なんでか聞こうと思ったら、その2人の少年はもういなくなっていました。今はラオスに行ってその2人の少年に会って聞きたいです。

ラオスに行ってラオスの人は、やさしいし明るいことがわかり日本はちょっとつめたいこともわかりました。

ラオスに行って一番印象に残ったのは、もう全部印象に残りました。その中でもお別れの式でみんなで踊ったりしたときも、そのときはあまり悲しくなかったのですが、次の日に別れるのがさみしかったです。あと学校で交流会をしたときに日本の踊りを教えたときに自分で新しい踊りを見つけくわえたのをみんなが真似をしてくれて嬉しかったです。

ラオスに行く前と行った後では、すごいちがいます。あんな絶対にかかないって言った自分がゆるせなくらいよかったです。

最後にこれからの自分について。自分の夢はサッカー選手で、なれなかったとしても1つだけ絶対かなえたいです。それはもう1回ラオスに行って中田選手のように命のすばらしさ、サッカーの楽しさを教えてあげることです。



本人：後列左から2番目

ラオスに行って

加世田常潤高等学校 2年 有菌 貴彬

自分が国際協力体験事業のことを知ったのは学校の先生に聞いたのが最初でした。初めはラオスがどんな国か、どこにあるのかも1回目の事前研修があるまでは何も分かりませんでした。1回目の事前研修では基本会話の自己紹介やあいさつなどをラオス語で学びました。初めて聞いた言葉で難しくてあまり覚えられませんでした。

2回目の事前研修では、ラオス語で自己紹介をしたりラオスの歌を歌ったり青年海外協力隊で派遣された人の話を聞いたりしました。

2回の事前研修が終わってラオス語は発音が難しくラオスに行くとちゃんと会話ができるか心配になりました。それでも何とかかなると思ってラオスに行く日を迎えました。朝早くに鹿児島空港に行って結団式をしました。結団式ではラオスでの抱負を言いました。「僕はラオスの人とたくさん話をして、向こうでは野球をあまり知らないの、いっしょに野球がしたい。」と言いました。それが終わって飛行機に乗って福岡空港に行きそこからバンコクの空港に行ってバンコクからラオスに行きました。

ラオスに着いたのは21時頃でした。ホテルまでの移動中は想像していたよりも道も整備されていたし、街灯もあってあまり日本と変わらないと思いました。ホテルも凄く良いところでした。

1日目は飛行機での移動で凄く忙しい1日でした。

2日目はJICA事務所に行ってJICA事務所の仕事の話を聞きました。話を聞き終わると昼ご飯を食べてホームステイをするポンミー村に行きました。自分が泊まる所の人達は会った最初の時からいい人達だなと思いました。

次の日はホストファミリーと他の団員と村を散歩した後、お寺に行っておみくじを引いたら1番いいのが出て良かったです。その後ダムに行きました。デカ



本人：後列右から2番目

くて凄かったです。帰りにカエルを食べて帰りました。

4日目は青年海外協力隊の活動視察に行きました。初めに浄水場を見ました。濁った水が綺麗になっていたのはすごいと思いました。

次に保健師さんの所に行きました。ラオスでは外で子供を産んでいる話を聞いて、日本や他の国の援助があれば病院で子供を産ませてあげられるのになと思いました。次の日はポンミー村の小学校に行くと僕は他の団員と6人くらいでクイズをしました。子供たちは元気で楽しくてクイズも楽しくできました。その日の夜はお別れパーティをしました。知らない人も話しかけてくれて何を言っているのか分からないけれど、やさしさが伝わってきて嬉しかったです。凄く楽しかったです。

5日目はセタティラート病院に行きました。ここでは病院が日本の援助で建てられたこと、病院を作るのに全部で16億円かかったことを聞きました。夜はJICA関係者の人達とご飯を食べて、日本で起こっている事件やラオスでの生活のことについて話しました。

6日目は市内観光でした。タイとラオスに繋がっている友好橋に行ったり国立博物館に行ったりしました。国立博物館ではラオスの歴史の絵があってその中にはむごい写真もあってびっくりしました。その日の夜に飛行機に乗ってバンコクに行って福岡まで帰りました。福岡まではずっと寝てて起きたら福岡に着いていました。

この1週間で思ったことはラオスの人はとても良い人達だということです。ホストファミリーの男の子はいつもいっしょにいてくれて、英語とラオス語で話しかけてくれました。ご飯を食べているときも手で食べるので、あいまあいまに、タオルを渡してくれて、それでふくように言ってくれたり、外を歩いているときも家の中でもものが乾いていないかきいてくれて気を使ってくれました。

日本に帰って僕は今まで以上に自分から人と話すようになりました。違う国の人でも話しかけてくれるラオスの人達から学んだのだと思います。

またラオスに行きたいと思います。



本人：右から2番目

体験を通して

川辺高等学校 3年 永家 勇人

私が、この青少年国際協力体験事業に参加したことによって、青年海外協力隊の隊員や JICA で働く人、ホストファミリーの人たちに出会い、そして多くのことを経験し学び、世界観が広がりました。それにより、大きな目標も生まれ、その目標を達成するためにも自分なりに努力をしています。ラオスという国の文化に触れたこの貴重な8日間は、私の人生においてはほんの短い時間ですが、その短い時間で得たものや、この大切なラオスでの思い出を伝えたいと思います。

私たちがラオスに滞在したのは飛行機での移動の時間を除くと6日間で、その内ホームステイをした日数は4日間でした。その4日間で私の印象に残っていることの1つは、日本との文化の違いや環境の違いです。その文化の違いの1つがお風呂に関してです。日本と違いラオスでは、お湯をためて入るという習慣がないのか、バケツのような容器に水をため、それをかぶるというものでした。それ以外でも、食事をするときには手を使って食べたり、ヘルメットなしでバイクに乗っているなど、とても変わっていると思いました。このときは、日本での生活が普通、常識だと思っていたから、このように考えてしまったのかもしれませんが。しかし、この「変わっている」という考えは、浅はか

でとても幼稚な考えだということに気づきました。なぜなら、ラオスの人々にとってこれが普通、つまり常識であり、日本との文化の違いだということに気づいたからです。そのとき私は、「変わっている」と考えた自分を恥ずかしく思いました。

2つ目に私の印象に残っているのは、ラオス人の優しさや近所付き合いの善さです。私のホームステイ先の家族は、仕事や学校があるにもかかわらず、家族の1人は必ず私に付き添い、さまざまな観光地を案内してくれたり、買い物に付き合ってくれたりなど、とても親切でした。私は見ず知らずの外国人に対し、ここまで歓迎してくれるラオスの人々の心の温かさを実感し、心が満たされた気持ちになりました。

最後に、自分の将来に関係した体験のことです。ラオスの滞在中に、青年海外協力隊の隊員の方の話を聞くために、ビエンチャン市内にある病院に行きました。その病院には日本人のスタッフが数人いて、ラオスの医療についての問題など聞いて、日本では考えられないことも海外では普通に起きていることを知りました。その話を聞いて、将来、理学療法士を目指している私としては、こういった問題に対して何かできることはないかと模索するきっかけとなったと思います。

今回体験したことは、私の将来を大きく左右するきっかけになったと思います。今まで本当に漠然としたものでしかなかった将来の目標が具体化し、その目標に対する熱意が非常に大きなものになったと思います。心に秘めた目標と私を見守ってくれる人たちがいる。これを力にこれからも努力していきます。



本人：左上

ラオスへの旅

鳳凰高等学校 2年 茂岡 希

この旅の中で私は、様々なことを体験し感じとり、考え、視野が広がったような、考え方が変わったような気がします。

8日間中4日間はホームステイをしました。ラオス語は事前研修で学習し、練習したからとは言えども、ホストファミリーを前に、上手に口から出てはくれませんでした。覚えた現地言葉を口にしても発音がわるいのか伝わらずに困ったり、ききたいこと、伝えたいことがあっても言葉にできず、表現できずにもどかしい思いをしたり、またおフロに入る習慣がないのか、毎晩、雨水をシャワーがわりにあびておフロとして利用しなくてはならなかったりと、なやむこともありましたが、そんなことが気にならないくらい、ホストファミリーはやさしく気づかい、私をあたたかく受け入れてくれました。言葉が伝わらなくても、動作で表現できなくても、伝わるもの、伝わってくるものはたしかにあります。一生懸命さ、気づかい、やさしさ、思いやり、そしてなによりも、笑顔です。笑顔といってもピンとこないかもしれませんが、私は笑顔のおかげでこのようなすてきな関係がきづけたと思っています。失敗したり、うまく伝えられず、伝わってこず落ちこんでいても「ポーペンニャン」(大丈夫)と笑顔で背中をトントンとされる行為に私がどれだけ助けられ、励まされたことか。目があつたときにニコッとするだけでも、相手もニコッととして話しますので話題のもととなります。ニコニコ笑顔でいると、ホストファミリーによく話しかけられるし、相手が笑顔だと、こっちもうれしくなるし、落ちつくし、笑顔のパワーのすごさを実感しました。別れの際は、日本に帰ることがとても嫌で、もっとホストファミリーのこと、文化や生活などが知りたくて、もっとラオスにいたくて、ホストファミリーともっと仲良くなりたくて胸がそんな



本人：右

思いでいっぱい、泣いてしまいました。ホストファミリーの女の子たちは、「スマイル、スマイル」と言って、笑いながら泣いていました。私は自分が好かれているのか、今後も本当に仲良くしたいと思われているのか、ホームステイ中に言われたことが、お世辞なのか冗談なのか本当なのか、分からなかったのが不安でしたが、彼女らの涙をみて、とても安心し、うれしくなりました。笑顔のおかげでとてもすばらしい国際交流ができました。私は必ず2年後に会いに行こうと決意しました。夏休み中、ラオスのホストファミリーの家に国際電話をしました。正直に何を言っているのかさっぱり分かりませんでした。最後は、相手も何をいっても伝わらないとわかったのか、ずっと笑って、どちらが楽しそうか、笑い声の競争というように、ずっと笑っているだけでした。私は、元気そうな声がきけたこと、私のことを覚えてくれていたことだけで、とても満足でした。ラオスに行ったことが鮮明に思い出せてよかったです。またお正月、家に帰った時は電話したいと思います。

プログラムの中ではホームステイ以外に、青年海外協力隊に会って、話をきいたり、施設を見学したりしました。私には看護師になりたいという夢があります。助産師として活動している難波さんという方に会い、話をきいて、私の夢はますます大きく明確なものになりました。今後は、看護師、助産師の国家試験を目指します。難波さんにあつてかわつたのは夢、目標だけではありません。気持ちの持ち方、意欲もだいが変化しました。今、私の中は、看護師、助産師になりたいという気持ち、青年海外協力隊に参加してみたいという気持ち、そのためにも、もっとしっかりした人間になりたい、もっと勉強しなくては、という気持ちでいっぱいです。とてもやる気にみちています。思った以上に隊員さんたちはキラキラと輝いてみえました。私もいつか、ほかの人たちからみて、輝いているように見られたいので今後、一生懸命、がんばりたいと思います。

このようにすてきな場を作ってくださった方々に本当に感謝します。ありがとうございました。



本人：右

体験を通して

加世田常潤高等学校 3年 宿里沙弥佳

今回私は7月20日～27日までの7泊8日間鹿児島県青少年国際協力体験事業に参加してきました。派遣国はラオス人民民主共和国という所で行く前は電気や水などない場所だと聞かされていました。行く前に2回程研修が行われ、そこでラオスの習慣、語学などについてはもちろんのこと国際協力とは何かなど学んでラオスへの出発に臨みました。私は海外に1回も行ったことがなく不安と緊張で出発する時までいっぱいでした。ですが当日の結団式を終え、空港を出た時は「少しでも日本の文化を伝え、ラオスの農業など色々なことを知りたい」という気持ちが強くなっていました。

ラオスに着いてからは4日間ホームステイをしながらJICA事務所や青年海外協力隊の方々の活動視察・現地子供達との交流などしてきました。現地に行って一番最初に感じたことは、思っていた以上に田舎ではないなと思いました。道路も広く整っており、バイクや車など普通に走っており日本とそこまで変わらないと思った程です。ですがこれは都市ビエンチャン周辺だけであり、ホームステイ先のポンミー村や北部の方ではまだボコボコ道で、今からという段階です。

これは私が衝撃を受けたことなんですが、ポンミー村に向かう途中やけに道端にゴミが散らかっているのが目に入りました。日本ではポイ捨て禁



本人：中央

止やリサイクルと言われているのにと悲しくなっていました。まだ、果物の皮などは自然に還ると分かるのですが、ペットボトルなどプラスチック類は土の中に残ると思います。小学校の子が飲み物の袋を道端に投げて捨てたときに「いいの？こんなところに!!」と思ってしまう注意したくても言葉が分からず歯がゆい気持ちになりました。逆に楽しかったことは現地の子供達との交流でした。日本のクイズを出したり、ラオスの歌やおはら節を踊ったりしました。最初、私はラオスの子供達とどう接して良いのか分からなかったんですがお互いの国の踊りをしていくうちに段々と心が打ち解けていきました。言葉は通じなくても相手の表情などを見て、楽しんでくれていると実感できました。学校といっても日本みたいに教科書、筆記具など全員が持っているわけではありません。最後に配った

ノート・ペンは大変喜ばれサインも求められました。子供達の笑顔は輝いており、私はパワーを貰いました。

青年海外協力隊の方々にも同じようにパワーと勇気をもたらしたような気がします。水質検査をされている方、保健師、看護師、助産師さんの所に視察しに行き話を伺ったりしました。水道局や病院など日本が援助して造られており、ラオスと日本は身近な存在なんだと知りました。協力隊の方々は自分の専門的な知識を教えて伝えようとしているので凄い生き生きしていました。でも最初の頃は知識はあっても言葉が通じないなど他にもさまざまな苦労があるそうです。また、日本のことを客観的に見れたり、人生観や物の見方が変わると言われ私も4日間ホームステイして少し分かるような気がしました。ホームステイ先には一人ずつ入り、言葉もあまり通じず指さし会話帳を活用していました。伝えたいと思っても言葉が分からず手探り状態でしたが、ジェスチャーなども使いなんとか鹿児島のことや写真の説明など出来ました。私は学校で茶道をしているのでそれも披露しました。茶道で出すお茶は、日本人でも苦いと思われ抵抗がある人がいますが、「おいしい。苦くないよ。」と言われホッとしました。少しでも日本の文化を伝えられてよかったです。他にも地元の食品のボンタン飴、鯉節など持って行き喜んでもらえました。最後の日には色紙にお互いの家族の名前など書き両家の思い出になれば凄く良いなと思い交換しました。ホームステイ最後の夜はお別れパーティーがありバーシーが行われました。これは宗教上の儀式で今回私達に村の人々が健康でありますように、日本に無事帰れますようにと願いを込めて手首に白い糸を結んでくれました。現地の方々は何も知らない私達に優しく接してくれたり、細かい所まで気にかけてくれてお別れのときは涙、涙でした。行く前は早く帰りたいと思うのかなと思っていましたが、逆に帰りたくない、ラオスにずっといたいと思うようになっていました。それだけラオスに対する思いが強くなり、1週間だけでしたが内容が濃い充実した日々が送れていたんだと確信できました。

ラオスに行って変わった事は何でもチャレンジしてみようという気持ちになりました。今までは表に出るほうではなかったのですが、今回を機に色んなことに挑戦し自分を高めていこうと思います。まだまだ視野を広げて、青年海外協力隊の方々のように自分を活かせるよう努めたいです。今回この14名と出会えて凄く嬉しく思っています。あと、貴重な体験をさせてくれた両親や周りの方々にも感謝したいです。



本人：前列左

今回の体験で

徳之島高等学校 3年 太 勇也

私は今回の体験で多くの経験をしました。初めは異国の地に行くので嬉しさも半分、不安な部分も半分あり、知らない人たちと一緒にやっていけるかどうかなどいろいろな不安がありました。



本人：前列中央

でも実際に着いて、同世代の人たちとも仲良くなり、ラオスのポンミー村の人たちも温かく迎えてくれたので、そのような不安はなくなりました。

初めてラオスの首都ビエンチャンに着いた時は首都とは言えど、日本のような街並みではなく、日本人の私から見ると、まだ乏しい場所だとは思いましたが、日本で見られない寺が多くあり、仏教がとても盛んな国なんだあと思いました。ポンミー村では4日間ホームステイをしましたが、日ごろ体験できない文化や生活習慣を経験しました。例えば、朝早く起きて、掃除をしたり、ご飯も主食はもち米で手を使って食べたり、お風呂やトイレも日本とは違って、日本人とラオス人の生活や、食文化の違いと発展の壁を感じました。ラオスの人々は、ラオスの気候に合った生活や貧しい中でも1人1人が楽しく生活しているように思えました。昼間の暑い時間は家でゆっくりして、朝の涼しい時に仕事をしているなど、自分たちで楽しい1日を過ごしています。

僕はラオスの人と初めて接して思ったことは、人の優しさでした。ポンミー村に行くと村の人皆が家族みたいな感じで、とても温かく、とても心が純粹でした。

間違っただけをしても「ボーペンニャン」日本語で「大丈夫」と言ってくれました。どこか僕の住んでいる島のような感じがして淋しい思いをすることもなく、初めは長いと思っていた4日間があっという間に過ぎていくのを1日1日感じて、逆に帰るのが少しずつ淋しくなっていました。

帰る前の日にお別れ会をしました。僕はお別れ会が始まるまでラオスの子供と野球やバドミントンなどをして遊んでいました。その間女子はお別れ会の料理を作っていました。お別れ会では初めにラオスの儀式をしました。その儀式ではラオスに行った私たち1人1人の幸せを願うものでした。儀式が終わると、1人1人の手に皆から1本ずつ白いミサンガのひもを結んでもらいました。その後にご飯を食べて、皆で楽しみました。

そしてお別れの朝がやってきました。日頃、日本で過ごしている4日間とは違い、とても長く、一生忘れられない4日間です。村の人たちやホームステイの家の人とお別れをしてバスに乗り込みました。バスに乗り込む足どりがすごく重く感じたのを今でも覚えています。そして皆でまた絶対にラオスに行くことを誓いました。

ラオスに行ったことで、1日1日考えさせられる事ばかりで、すごく学ぶことがありました。テレビや教科書で見るモノとはちがいで、実際に体験することは大切だと思います。それに得るモノもすごく大きいです。今までは日本にばかり目を向けていたけれど、これからはもっと広い視野で物事を考えていきたいと思えます。



本人：後列左

ラオスで感じたこと

純心女子高等学校 2年 西田 愛香

ラオスにいた1週間は、私の将来を大きく動かした。まず初めに感じたことは、日本がいかに恵まれているかということだ。日本では車が1家に1台あるが、ラオスは裕福な家しか持っていない。病院の治療は隣のタイまで行かなければならず、大変な思いをする。そんな中、ラオスの人々は、とても優しい人ばかりだった。初対面の私に「ごはん食べた」と聞いてくれるホームステイ先の娘さんの先生。またポンミー村の一番大きい市場へ行くと、なべの中に生きた大きいえびがたくさんいた。かえるは、ひもでつるしてあった。とても驚いた。ホームステイ最後の日、村長の家では「バーシー」と言われる儀式をして下さった。「団員1人1人が無事帰国できますように」とか、「健康でいられますように」とか白い糸におまじないをととなえながら祈って下さった。人に優しくすることはとても大切な行動だ。ラオスの人はどの人に対しても優しく丁寧に接してくれる。私も心を広く持ち、彼らのように誰に対しても優しく接する心を忘れないようにしたいと思った。

私は、今回初めてホームステイを経験した。また、話したこともない「ラオス語」。事前研修で勉強したものの、ホストファミリーと話すのはとても難しかった。またうちとけるのにもどう接していいのか分からなかった。しかし私と同じ歳の子供とは朝から晩までしゃべっていた。言葉は通じなくてもコミュニケーションをとることはできるのだと感じた。生活をしていて驚いたこともたくさんあった。まず、お風呂はお湯がないことだ。雨水で水あびだったのだ。カルチャーショックは大きかった。また、ご飯を手で食べる。最初は抵抗があったが、ホストファミリーに「上手だね。」と言われるまでに上達することができ、とてもうれしい気持ちになった。その国によっていろいろな文化が

あり、国際理解とはこういうことだと思った。同時に、私は日本についてあまり知らないと感じた。まず、自分自身の国、日本のことをもっと知り、日本のことについていっぱい教えたいと思った。

私はラオスに行って本当に積極的になった。何をやるにしてもまずははずかしさが先に立つ。しかし、この事業に参加して自信を持ってどうどうと発表することができるようになった。ポンミー村の小学校を訪問したとき、小学生はラオスの踊りを披露してくれた。みんなとても輝いていた。そして、私の方は、ラオスの小学生に書道を披露した。私が書き終わったら拍手をしてくれた。ホームステイ先の小学生の息子さんは私に花束を持ってきてくれた。とてもうれしかった。

「JICA」「青年海外協力隊」は、国際協力にたずさわるお仕事だ。ラオスで働いている「青年海外協力隊」の人々のお話を聞く機会があった。浄水場で水質検査をしている方、水は生活している上で一番大切なのに、ラオスの人は生水を飲めない状態にいる。」とおっしゃった。日本はいかに恵まれているかが分かったし、水が生きるためにとても重要だと考えさせられた。また保健師をしている方や助産師をしている方にもお話を聞いた。ラオスの人々は、治療をするとなるとタイまで行かなければならない。また車を持っている人も少ないので病院に行くまでの手段がないそうだ。しかし青年海外協力隊の方はその現場の人に知識を教えたり、患者さんに分かってもらえるようクリップをつくったりもしていた。熱心なその仕事ぶりに「かっこ良さ」を感じた。

私はラオスに行って将来の夢が定まった。まず英語は必ずマスターしようと思う。ホームステイをして通じなかったのもとても悔しい思いをした。そして「JICA」の事務所で働いている人と話した結果、私は青年海外協力隊になろうと決めた。国際協力にとっても興味を持ったからだ。

この1週間は、私にとって初めての貴重な経験ばかりで、この体験事業に今、とても感謝している。心からの言葉として最後に述べたい。

「本当にありがとうございました。」



本人：上



本人：左

ホームステイ

志布志高等学校 1年 荒武 凜

私は、ラオスに行ってとてもいい経験ができました。初めのラオスの印象は、すごく貧しくて食べる物もちゃんとないようなそんなイメージでした。わたしたち日本人は、ほんとうにそんな所で4日間生活できるのかとても心配でした。実際に行ってみると全然イメージとちがってとてもびっくりしました。首都のビエンチャンは日本とあまり変わらないような感じでとても栄えていました。

私たちがホームステイしたポンミー村は首都から離れたところにありました。ビエンチャンとはちがいで店などはなく家がたくさん並んでいました。まず初めにみんなで村長さんの家に行き、ホストファミリーの方と初めて会いました。自分が送った写真をたよりにホストファミリーの方が探してくれました。緊張してこんにちははしか言えなかったのを覚えています。ホストファミリーの方がわたしに話かけてきました。でも何を言っているのかわからなくて笑ってごまかしました。英語も日本語も通じなくてとても大変でした。自分が日本から持ってきたラオス語の本を指さしながら一生懸命話しました。それでも通じない事があり、もっとラオス語を勉強しておけばよかったと思いました。日本から行くときには5人家族と聞いていたけど、知らない男の人がいたり、子供がたくさんいたりしました。ラオスの人々は、近所や親せきがとても仲がよくとてもビックリしました。夜はみんなで外に集まって珍しい日本人を見ながらたくさん私にお話をしてきました。何を話しているのかわからなかったけど、やっ

ぱり笑顔とジェスチャーでがんばりました。ラオスの人は、会う度にごはん食べた？など、とても気づかせてくれてうれしかったです。ホストファミリーの小さい男の子がいてわたしが日本から持ってきた、ビーチボールをあげたらとても喜んで寝るときも離していませんでした。ホストファミリーの家での料理は見たことのないような物がたくさんできました。いろんな動物の肉などはとてもおいしかったです。お風呂やトイレは日本とちがいで、お風呂は雨水でした。トイレはその雨水で流しました。近所の子供や家の子供が寄ってきて遊ぼうと言ってきて毎日たくさんボールで投げ合いっこをしたり、サッカーをしたり折り紙をしたりして遊びました。言葉は通じなかったけど、とても楽しかったです。ホームステイ先のお姉さんにはとてもお世話になりました。自分があれをしたい、これを食べたいなどと言ったらいやと言わず聞いてくれました。とても迷惑をかけたと思うけれど、ラオスの方はとても優しい、いい人たちだと心から思いました。たった4日間だったけれどまだ1日しかいないような感じでした。別れの日の朝は、すごく悲しくてとても帰りたくなかったです。もう自分の家族のような感じです。絶対また行きたいと思います。



本人：左から2番目



本人：上

はじめてのラオス

川床中学校 3年 中藺 賢志

ぼくが、この体験事業に参加しようと思ったきっかけは、先生の紹介でした。その時、ラオスの事も知りませんでした。国名は知っていましたが、人口や特色などははっきりしたことは何も知りませんでした。ぼくは、ラオスの人はどのような生活をしているのか、どのような文化なのかを知ってみたいと思いました。

ラオスに行くまでに、2回の事前研修がありました。事前研修では、おもにラオス語の勉強をしたり、ラオスの歌を練習したり、ラオスで披露する出し物の打ち合わせをしました。研修では、課題がたくさんあって大変だったけど、友達も出来て、楽しかったです。

7月20日、ラオスへ出発。すごくドキドキしました。鹿児島空港からラオスまで3回飛行機を乗り継ぎ、ラオスに着いたのは夜中の12時でした。夜なのにバイクや人が多くて日本とは違うにぎやかさがありました。

7月21日、朝ホテルを出発し、JICA事務所へ向かいました。ラオスで実際に活動している協力隊の人からどのような活動をしているのか詳しく聞けて、とても勉強になりました。昼食をすませた後、いよいよホストファミリーがいるポンミー村へ向かいました。人口1800人という小さな村でした。ぼくのホームステイ先はお父さん、お母さん、5歳の娘の3人家族でした。ぼくのことを、温かく迎えてくれました。でも、その日は、コミュニケーションがあまりとれないまま終わってしまいました。

7月22日、この日は、1日ホストファミリーと過ごしました。起きてまず、シャワーを浴びました。ボイラーはなく水でした。それから、朝食を食べました。主食はもち米で、手でひと口分とって、指で少しこねてから食べました。初めての体験でした。食事はとてもおいしかったです。それから、お父さんと一緒に田んぼに行き、田植えの手伝いをしました。日本のように苗を植える機械はなく、ぼくはお父さんと植えてない所に、苗を1本ずつ手で植えていきました。それから、田んぼにいるカエル、魚、カニをつかまえました。それを田んぼの近くに住んでいるおじいさんの家に持って行き、カニ、カエル、魚を串に刺して焼き、3人で食べました。初めて食べたのですが、いがいと美味しかったです。夜は、指差し会話帳を使って夜遅くまで

話がもり上がりました。

7月23日、JICA事務所で保健師として活動している人の話を聞きました。とても貧しい状況の中で、赤ちゃんを産むということが大変だということを知りました。

7月24日、ポンミー村の学校に行き交流会をしました。ぼくは日本の伝統的な武道である剣道を披露しました。その後、ゲームをしたり、歌を歌ったりして交流を深めました。その夜、お別れパーティーがありました。ご飯を食べた後、みんなで一緒に踊ったりしてすごく楽しい夜でした。

7月25日、ホストファミリーとのお別れの日。あつという間の4日間でした。ホストファミリーとの別れはとてもつらかったです。ポンミー村の人達は本当に明るくて、優しい人達でした。

7月26日、ビエンチャンの街を見学してまわりました。仏教の国というだけあって、あちらこちらで僧侶を見かけたり、タートルアンやブッタパークなど仏教にちなんだ建物がたくさんありました。思っていたよりも街で驚きました。

7月27日、帰国。あつという間の1週間でした。今一番思うことは、ラオスに行ったら本当に良かったという事です。協力隊の事も前よりも、もっと興味がでてきました。ぼくをラオスに行かせてくれた両親、そしてそれに関わって下さった関係者の皆さん、ありがとうございました。ラオスでの思い出は、ぼくにとって一生の宝物になりました。また必ずラオスに行きたいです。



本人：左



本人：左

メコン大河に導かれた14名

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長
 団長 弓場 秋信

福岡空港を飛び立って5時間、期待と緊張・不安の中バンコック国際空港に到着した団員。ビエンチャン空港行を待つ間、ラオスで披露するラオス語の歌の練習を始めた。すると人気の少ない場所を選んでの練習にも拘らず一人の紳士が、「ラオスの歌が聞こえたので」と駆け寄り話しかけた。自分達の歌声がラオス人に認められたことで団員に笑顔が戻った。

国際空港とはいえ日本の中核地方都市空港よりも小さいビエンチャン空港に到着したのは鹿児島空港を飛立ち15時間後。インドシナ半島6カ国を縦断するメコン大河の恵みを受け発展した人口60万人の首都ビエンチャンは、平穏な日々を取り戻し35年ぶりに訪問する私の期待を裏切らなかつた。森に囲まれ小鳥が顔を出す街並み、優しさに包みこまれた笑顔の人々。

国際協力機構JICAラオス事務所で、ラオス人民民主共和国概要、JICA事業、保健と教育状況、そしてラオスにおける青年海外協力隊事業について各担当者より説明を受け、首都から北東75km、農業が中心のホームステイ先ポンミー村へと向かった。どんな家族、言葉は、食事は、トイレは、多少の不安と期待の高まりと共に村に到着した。事前に団員と同行者の顔写真付プロフィールを入手していたホストファミリーは、バスから降りる私達を弾けんばかりの笑顔で迎え、早速わが息子や娘を探し手を取っていた。

それぞれの家庭に1人づつ引取られた団員を訪問すると、30帖ほどの居間、家族の規模に合わせた寝室、必要最少限の家財道具、手動式とは言え綺麗なトイレ。

団員が、「事前研修で、ラオスは世界最貧国（後発開発途上国）と聞いていたけど貧しくない」と言った。この疑問は私を含め全員が抱いた。1人当たりGDP（国内総生産）は年間\$606（月間約5500円）、統計資料と実生活とのギャップは？

ポンミー村は375世帯約1800人が住む。その中で私達がホームステイしたのは17世帯。殆どが村のメイン道路に面している。メイン道路から遠ざかるに従い伝統的な高床式住居で貧富の差が見えてくる。私の滞在先は、敷地が約1000坪。敷地内に鶏の放し飼い、カエルやナマズの養殖、果物の木、野菜栽培そして水田から米2トンの収穫。疑問を解く鍵は、統計に表れない「自給自足」



本人：中央

である。

ホームステイ期間中に、田植え、木炭用木の伐採、家の手伝い等で家族と過ごしたり、地元の小学校での文化交流、そしてビエンチャン近郊で活動する青年海外協力隊員の活動現場を訪問した。日本の援助で建設されたチャナイモ浄水場には、水質検査指導で名古屋市職員の鶴飼智弘隊員。大河メコンの水が、各工程を経てビエンチャン市内に水道水として供給されている。彼は、新しい世界を見たい。視野を広げたいと現職参加制度を活用しての協力隊参加である。

ビエンチャン市保健局で、保健師として「母子保健改善プロジェクト」に取り組んでいる鈴木彩乃隊員は、ラオスの母子保健環境の現状を全員参加のワークショップで紹介した。乳幼児死亡率の改善には、貧困、医療設備、看護師・医師の確保、インフラ整備などの問題が山積していた。マザーテレサの本を読み協力隊を目指した鈴木さんは、厳しい環境下ではあるがラオス人の優しさに支えられ自分に出来ることを探し奮闘していた。

日本の援助で建設されたセタテイラート病院では、難波美絵隊員が助産師として技術移転に取り組んでいる。中学生時代のテレビドラマに登場した協力隊員役を観て協力隊に興味を持ち、助産師の経験を積む中で「何かが得られる」と協力隊を応募した難波さん。同じ病院で、シニア海外ボランティアとして総看護師長と席を並べる清水直美さんは、「自分を必要としている所があれば」と昭和59年から国際協力の現場を飛び回っている。

言葉・文化・生活環境の違い、改善策の前に立ちほだかるラオス政府の予算等と戦いながら、ラオスを愛し汗を流す協力隊員は、眩しいぐらいに輝いていた。その姿は団員にとり憧れの世界であり、将来の自分をそこに重ねていた。

ホームステイ期間中、団員はジェスチャー、片言の英語、指さしラオス語会話帳を駆使してコミュニケーションを図った。お互いに言葉での意思疎通が難しい分、相手の表情・態度を通して相互理解に務めた。それ故に、より深い絆で結ばれたホームステイ先家族の下を去り難く、心からの感謝と惜別の情が自然に溢れ出る涙となった。

団員14名は、この事業参加の動機と訪問先での目的が何であるかを理解し、予定時間を超過するほど積極的に意見交換した。帰国後の表敬先・報告会での団員の発表内容は、7泊8日で確実に成長した証であった。この14名が、探し見出した目標・夢の実現に向かって努力し大きく花開く事を願って止まない。



本人：右

同行者感想

優しさとひたむきさに触れた自分再発見の旅

(財)鹿児島県国際交流協会
総務企画課長 上片平文裕

今回、この事業で初めてラオスを訪れましたが、毎日が感動の連続でした。

この感動は、ホームステイ先のラオスの人達の優しさに含まれることで、また青年海外協力隊員の方々のひたむきさに触れることで得ることができたものでした。

ホームステイ先は、首都ビエンチャンからバスで1時間半ほど北に向かった場所にあるポンミー村という農村でしたが、ここで過ごすうちに、私はとても満たされた気持ちになっていきました。

ホストファミリーは、私たちの拙いラオス語を何とか分かろうと、一生懸命私たちと向き合い、また家族の一員として温かい気持ちで毎日見守りながら接してくれました。

この穏やかな優しい気持ちに包まれて過ごすことで、心が癒されていったのは、私だけではありませんでした。

団員は、ラオスについて、低い所得や十分ではないインフラなど、日本の生活水準との格差についての情報は得ていました。

しかし、ラオスで生活するうちに、日本人は心の豊かさをどれだけ持ち合わせているのだろうと考えるようになっていきました。

ある団員は、「日本に帰るチケットはいらないから、このままここにいたい。」とっていました。また、別の団員は帰国後、「日本の人が冷たいと感じるくら

い、ラオスの人の心は温かかった。」と感想を述べていました。

団員らは、ラオスの人達の温かさに触れることで、自分自身の普段の生活を見つめ直すことができたようです。

しかし、この温かさの一方で、国としては様々な基盤整備が必要なことも事実です。

青年海外協力隊員の方々は、ラオスの発展のため、それぞれの分野で、地元のスタッフと一緒に汗をかいていました。

団員らは、それぞれの隊員が活躍している姿を目の当たりにし、また懇談の場などを通じて、協力隊員として働くことの気持ちを直接聞くことで、大きな刺激を受け、自分の将来を改めて見つめ直していました。何人かの団員は、ラオス滞在中に、「自分が今学んでいることをもっと勉強して、将来は、青年海外協力隊員として活動したい。」という気持ちを話してくれました。

この事業を企画した立場の者として、こんなにうれしいことはありません。私たちは、団員が今の輝いた気持ちを持ち続けられるよう、これからもサポートをしていきたいと思います。

最後に、この事業のため多大な御協力をくださいました協賛企業、並びに関係者の方々に、心からお礼を申し上げます。

余談ですが、私はホームステイ先でホストファミリーのお母さんが作ってくれる料理がとてもおいしく、いつも、「セーブ (おいしい)」と言っていたので、ホストファミリーから、「ミスター・オイシイ」という、栄えあるニックネームをいただき、ラオスを旅立ちました。



本人：左

同行者感想

幸せとは…

青年海外協力隊ラオスOV 米川 明美

「中高生と一緒にラオスへ行きますか」と団長からお誘いを受けた時、私には無理ではないかと戸惑いました。ラオスでは村にホームステイをし、子ども達の健康管理をしてもらいたいと言われ、ラオスの医療事情を知っているだけに更に不安になったことを思い出します。とにかく中高生と接する機会のない私にとってまず、子ども達とどう接すればいいのかが分からなかったのです。しかし、行くことが決定してからは、国際協力に関心がありラオスへ行ってみたくと思う中高生って一体どんな子ども達なのか、私の興味はなによりも子ども達14名に向いていました。

事前研修で初めて顔を合わせた時、「体力に自信がある人？」の質問に返事がなく不安がよぎり、2回目の研修でやっと1人ひとりの特徴が分かり始め、名前も覚えラオスへの期待が深まりました。ラオスで青年海外協力隊員だった私にとって見慣れた光景が子ども達にはどう映るのか、そして彼らがどう感じるのかがとても知りたくなったのです。

早朝に鹿児島を出発し、首都ヴィエンチャン市のホテルに着いたのが夜遅く、とても疲れていたと思いますが、取りあえずラオスに着きほっと安堵したのもつかの間、子ども達の部屋のベッドが足りないという問題が起こりました。日本だったらこんな問題は起こらないだろうに、私はラオスに着いたことを実感しながらもこの旅の前途を案ずることとなりました。一方、子ども達はたくましく、みんなが協力して問題解決に向かっていく姿を見てとても頼もしくも感じました。

ホームステイ先であるボンミー村に向かうバスの

中、着いたらどんな出会いが待っているのか期待と不安が入り交ざり、窓越しに見える風景が隊員時代を思い出させていました。日本での生活よりも不便なことがあったとしても、私の記憶の中の優しく、恥ずかしがりやなでも人懐っこいラオ人に彼らが出会えたならば絶対にラオスのことを好きになって日本へ帰るだろうと。そして、ボンミー村のホストファミリーの方々には心待ちにしていた様子で出迎えてくれました。「私の子どもはどの子か？どの子どの子」と口々に探している姿をみて改めてラオ人の温かさを感じました。ホームステイの初日、2日目は言葉がうまく通じないことや、生活習慣の違いなどから戸惑ったのか「帰りたい」「通訳して」と頼ってくる子もいましたが、2泊した後は誰もが「帰りたい」と言いはじめようになりました。

ホストファミリーだけでなく、村の人々とスポーツなどをし、交流し溶け込んでいく姿をみて子ども達の柔軟さ、協調性、吸収力や可能性などを強く感じました。村の舗装されていない赤土の道を一緒に歩きながら「ラオスの人ってどうしてこんなに優しいんだろう」「日本人がなんだか冷たく感じるよ」「日本って幸せなのかな」と話してくれたり、青年海外協力隊員の活動現場を訪問した後は「勉強もうちょっと頑張って、隊員になってラオスに来たいな」など話してくれたりする彼らを見て内心うれしくなりました。そして、みんなのおかげで全員が元気に帰国することができ安心しました。今は、帰国後の子ども達はラオスでの体験を踏まえどのように感じているのか興味津々です。

関係者皆様のご協力の下、この国際協力体験事業に参加させて頂き、14名の子ども達、同行者、ラオスの人々と出会え、時間を共有できたことに感謝いたします。今後もこの事業に数多くの子供達、様々な同行者が参加でき、貴重な体験ができることを願っています。コーコーブチャイ（ありがとうございました）。



本人：右

「体験する」ということ

青年海外協力隊ボリビアOV 森谷 弥生

ポンミー村の朝は早い。少し明るくなり始めた頃、甲高い鶏の鳴き声と共に、家の中では気配を感じる。「サー、サー」と手ぼうきでセメントの土間を掃く音、メー（ラオス語でお母さんの意味）が子供達と何か話している声、庭に放し飼いになっている雛の鳴き声など、いろんな音が耳に入ってくる。自分の日常とは違う音だ。しかしそれに違和感があるわけではなく、懐かしくゆったりとした気分にならせてくれる。「今日は団員の家をそれぞれまわる予定だ。みんなはどんな朝を迎えているのだろうか？」

各家をまわりながら、同行しているラオス協力隊OVの米川さんの通訳で、話を伺い、団員の生活環境を見せて頂く。「初めて鶏をさばいた」「田んぼに行った」「魚はほぐして食べさせてくれる」「食事の時、家族と一緒に時間を合わせて食べる」食事の支度はかまどに火を起こすところから始まる。食卓にあるスープひとつにとっても、材料をつぶしたり、かまどで煮たりと時間と手間のかかる作業だ。「この筍のスープを作るのに2～3時間はかかると思いますよ」と聞き驚いた。手間と時間がかかるというのは、今の私達の生活においては敬遠されることが多く、常に効率性を求められている。もちろん、私たちへのもてなしの気持ちの表れもあると思うが、1回の食事にこれだけ手間と時間がかけられること、自分と家族の命の源となる食事をとても大切にしていることに豊かさを感じた。

帰鹿したばかりの解団式の時に、ある団員が興奮気



本人：左



本人：右

味に「私、カオニャオ（もち米）もらったんですよ！カオニャオ！」と、留守番していたラオス語の分からないスタッフに話しかけ、不思議そうにしていた。ラオスでの体験がこんなにもしっかりと身についているんだと頼もしく思えた。もち米が主食のラオスでは、家族で食べる分のもち米は自分達で作っている家庭が多い。蒸したもち米を竹で編んだティップカオというおひつに入れる。彼女は日本文化を伝える架け橋になりたいと話していたけれど、きっと日本ではラオスとの架け橋に大きく貢献するだろうなぁと期待している。

3週間後の報告会でのみんなの言葉。「言葉は下手。でもわかってもらいたいと思う気持ちが大切」「自分が当たり前だと思っていたことがそうではなかった」「ご飯が食べられること、毎日勉強ができることは恵まれている。帰ってきてまず日々の生活の中でできることに取り組みたい」「今の生活、物にあふれているのに、まだ足りない、不便と感じていた」「ラオス人の温かさに触れ、自分のことばかり考えているのではないかと考えた」「ラオスも日本も変わらない」わずか1週間、実際に自分の五感をフルに働かせて得た彼らの言葉というのは、なんて心に響くのだろう。そして私自身も今の自分や社会の有様について考えさせられるきっかけとなった。これが体験事業の醍醐味かと改めて思う。

今回初めてこの事業に同行者として参加させて頂き、現地の交流を通して、団員のそれぞれがリーダーシップ、メンバーシップを発揮しながら成長していく姿に触れることができた。このような機会を頂いたことに感謝し、企画から準備、滞在中と最後まで支えてくださった協会ならびに関係者の皆様に心よりお礼を申し上げたい。

ラオス同行取材を経て

南日本新聞社 社会部 加藤 武司

会社の上司から今回の同行取材を知らされたとき、残念ながら私の中にラオスに関する知識はほとんどなかった。「ラオスは何語？人口はどれくらい？有名な観光地は？」。さまざまな疑問が頭をよぎる。だが、取材地がアメリカや欧州などと違い、メディアへの露出が少ないラオスだったことに心は高ぶっていた。

メコン川沿いに連なる屋台街。バスの車窓から見えるビエンチェンは想像していたよりもはるかに活気に満ちていた。20日夜、生徒14人とともにラオスに到着した。

「ラオス人は心が温かい」。21日夕、ポンミー村に足を踏み入れた直後、早速その温かさに触れることができた。バスを降り、村長宅で開かれた村民との初顔合わせ。運ばれてきたのは私の誕生日ケーキだった。少し恥ずかしい気持ちと異国の地で誕生日を祝ってもらえる喜び。身をもってラオス人のやさしさを体験することができた。

ポンミー村では生徒たちの順応性にあらためて驚かされた。日が暮れるまで村の子たちと野球を楽しむ生徒、指さし帳で家族と必死にコミュニケーションを取る生徒、村人に倣い片手でもち米を食べる生徒。村の生活にとけ込もうとする14人の思いがひしひしと伝わってきた。



滞在中、生徒たちが苦しんだのは「言葉の壁」だった。出発までに合宿などを通し基礎的なラオス語を学んだ14人。それでも現地では、指さし帳が頼りだった。



本人：左

ホームステイ先の家族の中に英語を話すメンバーが含まれる家庭では、頻りに英語が飛び交った。それぞれの母国語を使わずに英語で会話するラオスと日本の若者たち。彼らの姿を真近で見ていると、私自身、英語の重要性を再確認させられた。

1週間、生徒を取材する中で最も印象に残ったのが、現地の青年海外協力隊員らとの懇談会。研修で講師役を務めた隊員らが生徒の横に座り、生徒の個人的な質問に答えた。それまでは講師の話聞く「受け身の研修」が中心。この日の生徒たちは積極的に進路などを相談した。出席した隊員の一人も、「若いときに現場の生の声を聞ける14人はうらやましい」と打ち明けた。将来、青年海外協力隊を目指す生徒にとっては、頼もしい相談相手ができたとはいえない。

私も当初そうだったように、鹿児島県民にとって、ラオスはまだまだ深く知られていない国の一つ。今回、14人はラオス支援の必要性を自分なりに感じ取り、鹿児島に帰ってきた。「ラオスでの経験を周囲に伝えることが、自分たちができる国際協力への第一歩」。ポンミー村で取材中、数人の生徒が力強く話してくれた。

鹿児島へ帰ると、アフガニスタンで伊藤和也さんが拉致され殺害されたというニュースが飛び込んできた。日本では、伊藤さんの死を惜しむ声上がる一方、途上国への人的支援に否定的な声が上がったのも事実だ。今回、ラオスに派遣された14人の経験が、国際協力への理解を深める大きな力につながると信じている。

ポンミー村で学んだコミュニケーションの大切さ

KYT 報道制作部 波佐間崇晃

ラオスで過ごした日々は新鮮そのものでした。出発の日、空港での子どもたちの表情は、私の予想よりも不安そうでした。そんな中、私がインタビューで意気込みを聞くと、全員が力強いコメントを返してくれて驚きました。しかもそれぞれが、「日本のスポーツを紹介したい」「現地の文化を学びたい」「同じ世代の友達と仲良くなりたいたい」など、ラオスでの明確な目的を持っていることに感心しました。逆に気合いを注入されました。



本人：右

女性陣は特にコミュニケーションをとることを頑張っているように思いました。機内で「指さし帳」でラオス語を勉強している姿は素晴らしかったです。実際ポンミー村では積極的に話しかける姿を多く見かけました。私は挨拶程度しか覚えていなかったのが現地に行くととてももどかしい思いをしました。川島さんやサノンさんに訳してもらい助けて頂きましたが、自分の言葉でもっとやりとりをしたかったです。

ホストファミリーの皆さんからは「家族の大切さ」を再認識させてもらいました。ホストファミリーのおばあちゃんに手首に巻いてもらったオレンジ色の紐は今でもそのままにしています。ご飯は必ずテーブルを家族で囲んで食べるというラオスでは当たり前文化。今の日本では少なくなっている光景です。帰国して福岡の実家に帰った時。家族に呼びかけてみんなで夕食を食べました。ラオスでの体験がなければ、そう言い出すこともなかったと思います。ラオスでは家族のありがたさを教えてもらいました。

また、子どもたちが思春期という大事な時期にこの体験をすることが出来たのは本当によかったと思います。思春期には家族に対してつまらない意地を張って反目してしまうことがあります。家族と一緒に時間を過ごすことができることは素晴らしいことだ、ということ子どもたちも分かってくれたはずで。

そして、青年海外協力隊の方々との出会いも大きなものでした。出生率の低さの原因となっている高額出産費用の問題が中でも衝撃的でした。当然日本の方が恵まれた環境だとは思っていましたが、「現在でも一人で病院に行かず産み落とすケースが多い」というラオスの状況があまりにも日本とかけ離れていてショックを受けました。また、隊員の方の報酬が予想よりはるかに少なくボランティア精神にあふれる方なのだ胸が熱くなりました。撮影をしながら、子どもたちが熱心に話を聞いている姿が印象的でした。座学ではおとなしかった子も、食事会では次々に質問を聞いて素晴らしかったです。この子たちは本当にこの事業に興味があって、自分の意思で参加したのだと思いました。あのメンバーの中から将来は青年海外協力隊に入隊する人もいるのでしょうか？今から楽しみです。

ラオスでの生活は私にとって本当に忘れられない時間となりました。このような機会をいただきましてありがとうございました。子どもたちは数年後にまたラオスへ行くと言っていました。3年以内には僕も必ず行きます。



ラオス活動隊員からのメッセージ

ラオスで経験したこと、是非、学校みんなに伝えてください。
のんちゃんなら、きっと学校みんなが、
ラオスや協力隊に興味を持てるように、伝えることができると、
期待しています。

私達も、のんちゃん達に会えて、とても楽しかったです。
鈴木さんも、鵜飼君もそう言ってました。
本当にありがとう。

進路のこととか、もちろん、それだけじゃなくて、
家族とのかことや友達とのかこと、好きな人とのかこととか、
今後、いろんな壁にぶつかったり、
悩んだりすることがあると思うんだけど、
信念を持っていれば、どうかたちであれ、
願いは叶うものだと、私は思っています。
そして、幸せになれるものだと、私は思っています。

もしかしたら、これから、もっとたくさんの刺激を受けて、
国際協力以外に興味もむくかもしれないよね。
それはそれで、私はいいことだと思うから、
視野を広げて、いろんなことにチャレンジして、
素敵な人生を送ってください。

私も、いつのんちゃんと話しても、はずかしくないように、精一杯、頑張りますね。

このメッセージは、セタティラート病院で助産師として活動中の難波美絵隊員から団員へいただいたものです。

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

1 趣 旨

鹿児島県の青少年を開発途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の体験や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともにホームステイや学校、施設などでの交流を通して相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。

また、派遣後は、これらの体験を報告会などを通して学校や地元に戻元し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

2 事業主体

主催：「鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会」

※構成団体：青年海外協力隊鹿児島県OB会

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

(財)鹿児島県国際交流協会

共催：鹿児島県内の関係市町村

後援：独立行政法人国際協力機構九州国際センター、鹿児島県、鹿児島県教育委員会

協賛：鹿児島県内の企業

3 派遣先

派遣国はアジア諸国を対象とする（実績は別紙参照）

4 派遣者

参加者：県内各地から募集・選考した10～20名の中学生、高校生、専門学校生

同行者：実行委員会関係者と新聞社、テレビ局など報道関係者

共催市町村職員

5 実施時期

7月下旬～8月上旬の間の1週間程度

派遣の前後に事前研修会、報告会なども実施

6 経 費

この事業の実施に要する経費は、実行委員会の構成団体、協賛企業、共催者（参加者に対する助成金による方法を含む）及び参加者が負担する。

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

| | 派遣国(地域) | 派遣期間 | 人数 (生徒数) | 参加者の出身市町村・共催市町村 | 備考 |
|------|---------------------------------------|-------------------------------------|-------------|--|----------------------|
| 第1回 | マレーシア (コタキナバル, サリマンドゥ) | 平成3年 3/27(水)～4/3(水) (7泊8日) | 17名 (10) | 鹿児島市, 阿久根市, 名瀬市, 市来町, 伊集院町, 祁答院町, 内之浦町, 佐多町 | 公募 |
| 第2回 | マレーシア (スプランペラ) | 平成4年 3/27(金)～4/3(金) (7泊8日) | 17名 (10) | 鹿児島市, 鹿屋市, 大口市, 指宿市, 隼人町 | 公募 |
| 第3回 | マレーシア (クチン, テラガアイール) | 平成5年 7/23(金)～7/30(金) (7泊8日) | 17名 (10) | 鹿児島市, 加世田市, 三島村, 隼人町, 志布志町, 高山町 | 公募 |
| 第4回 | インドネシア (バンドン, パシールカリキ) | 平成6年 8/1(月)～8/7(日) (6泊7日) | 15名 (9) | 鹿児島市, 出水市, 指宿市, 垂水市, 菱刈町, 霧島町 | 公募 |
| 第5回 | マレーシア (コタバル) | 平成7年 7/30(日)～8/6(日) (7泊8日) | 16名 (10) | 鹿児島市, 国分市, 額娃町, 宮之城町, 隼人町, 吾平町, 根占町, 中種子町 | 公募 |
| 第6回 | マレーシア (タイピン, パリットムンントリー) | 平成9年 7/27(日)～8/3(日) (7泊8日) | 16名 (11) | 鹿児島市, 串木野市, 東市来町, 伊集院町, 郡山町, 日吉町, 吹上町, 金峰町 | 市町村 推薦 |
| 第7回 | マレーシア (クチン, テラガアイール) | 平成10年 7/26(日)～8/2(日) (7泊8日) | 25名 (20) | 鹿児島市, 大口市, 国分市, 菱刈町, 始良町, 蒲生町, 溝辺町, 横川町, 栗野町, 吉松町, 牧園町, 隼人町, 福山町 | 市町村 推薦 |
| 第8回 | タイ (アユタヤ, ルンカーオ) | 平成11年 7/30(金)～8/5(木) (6泊7日) | 14名 (9) | 鹿児島市, 指宿市, 加世田市, 喜入町, 笠沙町, 知覧町 | 市町村 推薦 |
| 第9回 | タイ (チェンマイ, メーカンボン) | 平成12年 7/24(日)～7/31(月) (7泊8日) | 20名 (14) | 鹿児島市, 鹿屋市, 国分市, 垂水市, 祁答院町, 財部町, 未吉町, 串良町 | 市町村 推薦 |
| 第10回 | ベトナム (ホーチミン, フーホイ) | 平成13年 7/20(金)～7/26(木) (6泊7日) | 19名 (13) | 鹿児島市, 出水市, 加世田市, 国分市, 垂水市, 祁答院町, 溝辺町 | 市町村 推薦 |
| 第11回 | ベトナム (ホーチミン, タンビン) | 平成14年 8/4(金)～8/10(木) (6泊7日) | 17名 (11) | 鹿児島市, 串木野市, 枕崎市, 国分市, 垂水市, 溝辺町 | 市町村 推薦 |
| 第12回 | タイ (ナコンラチャシマー県を 予定していた) | 平成15年 SARS及び鳥インフルエ ンザの影響により中止 | | | 市町村推薦 予定 |
| 第13回 | マレーシア (クアラルンプール, マラッカ市, トレンガヌ州) | 平成16年 7/19(月)～7/26(月) (7泊8日) | 13名 (9) | 鹿児島市, 枕崎市, 国分市, 実行委員会枠 | 市町村推薦 実行委員会 推薦 |
| 第14回 | ベトナム (ハノイ, ホアビン省, モーハイ村) | 平成17年 7/24(日)～7/31(日) (7泊8日) | 20名 (14) | 鹿児島市, 枕崎市, 串木野市国際 交流協会, 国分市国際交流協会, 知覧町, 実行委員会枠 | 市町村推薦 実行委員会 推薦 |
| 第15回 | マレーシア (クアラルンプール, マラッカ市, サバ州) | 平成18年 7/22(土)～7/29(土) (7泊8日) | 18名 (12) | 鹿児島市, 枕崎市, 霧島市, 知覧町, 実行委員会枠 | 市町村推薦 実行委員会 推薦 |
| 第16回 | ベトナム (ハノイ, バクザン省 バクニン省) | 平成19年 7/22(日)～7/29(日) (7泊8日) | 23名 (17) | 鹿児島市, 枕崎市教育委員会, いちき串木 野市, 霧島市教育委員会, 南さつま国際交 流推進協議会, 知覧町, 実行委員会枠 | 市町村推薦 実行委員会 推薦 |

LAOS



＝ 編集・発行 ＝

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

T892-0816

鹿児島県鹿児島市山下町14-50 かごしま県民交流センター1階
(財)鹿児島県国際交流協会内

TEL: 099-221-6620 FAX: 099-221-6643

吹き出し: 宿里 沙弥佳

(鹿児島県立加世田常潤高等学校3年)